

# ムカシの競馬を読む

平成17年・東京競馬場  
安田記念  
優勝馬:アサクサデンエン

© JRA



## 第119回 10年・20年・30年前の6月



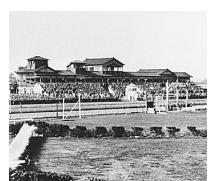
いまから10年前、平成17年の6月というと、安田記念をアサクサデンエンが、宝塚記念をスイートウショウが制した月。このうちアサクサデンエンは外国産馬だったが、後に母が輸入され、内国産馬としての弟、ヴィクトワールピサが皐月賞などのG1を勝っている。兄弟G1制覇はそれほど珍しいものではないが、片方がマル外、片方が内国産馬という形は希少性がある。他にはブラックホーク・ビンケカメオくらいしか思いつかない。

また、この馬は生産者(繁殖牝馬所有者)が関口房朗氏でもあった。生産を主たる生業としていない日本人の個人馬主どうしで、このような形になるのもまたかなり珍しい。

さて、この10年前からは、ものすごい身内ネタで申し訳ないのですが、こんな出来事をご紹介しよう。6月2日付の内外タイムスから。

「日本国内の競馬場で初めて行わ

# ムカシの競馬を読む



れた注目の新企画『ベインティファバシ・ベストドレッサー・コンテスト』は1日、応募受付人数59名により盛況裏に1次審査、最終審査と進み華やかなムード一色に包まれた。1次審査は難行、クリアした20名によるコンテストが行われ、優勝者に小島友実さんが選出された。ラジオ短波やグリーンチャンネルの競馬放送アシスタントとしても活躍している彼女は「恐縮しています。こういう企画の応援のつもりで参加したんですけど……ただ新しい感覚だし、競馬場の雰囲気も変わったと思う。こういうコンテストが、今後も浸透していくべいと願っています」と語った。

というわけで、このコンテストの優勝者はグリーンファーム会員の皆様にもおなじみのコジトモさん。ちなみに準優勝者は目黒貴子さんで、とても身内決着となつた。

さて、この10年前からは、ものすごい出来事があった。後に同馬の碑が京都競馬場内に設けられ、20年経つたいまでも入場者が手を合わせている。

同じ月に、ダート界では伝説と言えるレースがあつた。14日付の日刊スポーツから引用する。

「雨の川崎ナイター競馬に2万人都近い観衆を集めて行われた牝馬唯一の中央・地方交流戦、第42回日刊スポーツ賞エンプレス杯は、中央のホクトベガが2着のアクラアライデンに18馬身の大差をつけ、2分6秒5のタイムで圧勝した。中央G1馬が初登場した交流戦で、力の違いをさまざまと見せ付けた」

もう20年も経ってしまったが、この圧勝劇を鮮明に記憶している方は多いことだろう。18馬身、3秒6秒というものは、クラスを問わずなかなか見る機会のないものである。

交流レースが増えて制度が整備されたいまでは、逆にこのようなかかる機会のないものである。ところは起こらない。中央馬にも一定の枠があるからだ。このときは中央馬がホクトベガのみ。他の南関東から5頭、笠松から1頭の7頭立てだった。中央馬がもう1頭いればその馬が2着して着差はもう少し小さかれた可能性もある。ただその場合、伝説として残ることはなかつただろ

このコンテストは亡くなられた川島正行調教師が企画したもので、協力しようとキヤスター数名が参加したのだが、一般ファンでそこまで気合を入れて着飾った人はおらず、キヤスターが上位を独占。そのまま一回りの企画となつたのだった……私はこのとき荷物を持ちとして帯同していたのだが、コンテスト後にそのままの格好で小島さん・目黒さんがパドックを見ていたところ、馬上の張田京騎手が走りで驚いていたのをよく覚えている。

10年前からは地方競馬繁がりでもうひとつ。以前にも触れた話題だが、内田利雄騎手のフリーカ化実現である。15日付の東スポから引用しよう。

「事実上のフリー免許獲得を目指していた宇都宮のトップジョッキー・内田利雄が、岩手競馬場で2ヶ月間の『短期免許』を取得。伊藤和調教師を身元引受人として大

須田鷹雄 すだ たかお

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド・サイトウなど各種媒体に寄稿中。

最後に30年前、昭和60年の6月から2つほど出来事をお届けしよう。まずは10日付けのサンスポかから。

「9日の『札幌日経賞』の単勝支持率約17%で2番人気だったギヤロップダイナは、スタートで東騎手を振り落とすアクシデント。ガックリ肩を落としたのは、同馬の馬券を買ったファンだが、皮肉にもレースの方はカラ馬で直つ先に「ゴールイン」(中略)ちなみに走破時計は1分49秒9で札幌競馬場の『レコード』だった。

当時は札幌→函館の開催順だったので6月は札幌。そこでこの事件が起きていた。カラ馬1着はわりとよくあることだが、オープンの上位人気馬ということで話題にもなり、人々の記憶にも残った。記事中にレコードうんぬんとなるが、距離はダート1800m(当時の札幌芝ではなく、ダートのみ)。どうでもいい話だが、この「幻のレコード」は翌年、キヤラウエイという馬に正式な記録で更新(1分49秒3)されている。

記事中にもあるようにこのときは起きたのは東信二騎手だったのだが、メリーナイスの有馬記念と混同したり、「珍プレー!!根本」というイメージから後にこの馬でシンボリードルフを負す根本康広騎

このコンテストは亡くなられた川島正行調教師が企画したもので、協力しようとキヤスター数名が参加したのだが、一般ファンでそこまで気合を入れて着飾った人はおらず、キヤスターが上位を独占。そのまま一回りの企画となつたのだった……私はこのとき荷物を持ちとして帯同していたのだが、コンテスト後にそのままの格好で小島さん・目黒さんがパドックを見ていたところ、馬上の張田京騎手が走りで驚いていたのをよく覚えている。

10年前からは地方競馬繁がりでもうひとつ。以前にも触れた話題だが、内田利雄騎手のフリーカ化実現である。15日付の東スポから引用しよう。

「事実上のフリー免許獲得を目指していた宇都宮のトップジョッキー・内田利雄が、岩手競馬場で2ヶ月間の『短期免許』を取得。伊藤和調教師を身元引受人として大

手が落馬したと勘違いしている人も多いようだ。根本騎手は天皇賞秋が完全なテン乗りだった上で無実である。

もうひとつはセリの話題。この年にとにかく起きたというわけではないのだが、「千葉セリ」の20年前の様子が記事になっていたので紹介しよう。昭和60年6月11日の日刊スポーツから。

「全国のトップを切ってサラブレッド2歳馬のセリ市が10日、成田空港近くの千葉県印旛郡富里町の両国家畜市場で開かれた。会場は馬主、調教師ら競馬関係者約400人の熱気でムンムン。この日セリにかけられたのは千葉県、茨城県、宮城県などで生産されたサラブレッドの2歳馬42頭(後略)」

文中にある2歳馬とは、もちろん現表記の1歳馬。この時の最高価格馬はインターラーケンの59(牡・父サンフォードラッド)で525万円。記録を調べると残念ながら未勝利だったようだ。

時は流れ、20年後には千葉セリに税込2億円以上の馬が登場したのだから時代は大きく変わったものである。そういうえばトレーニングセールになつた当初は、調教供覧があれももう10年以上のことになる